

《 福 井 県 》

第 17 回東海北陸音楽教育研究大会 福井大会

第 14 回福井県学校音楽教育研究大会 福井・鯖丹大会

大会主題 「求める 深める つながる 音楽の学び」

1 はじめに

福井県では、平成19年に「音楽教育 そのさらなる可能性」を大会主題として、全日本音楽教育研究大会が行われた。その大会以降、幼稚園から大学までのつながりを大切にしながら、子供たちが主体的に学習に取り組む授業の工夫や音楽の学びの連続性と発展性のある学習展開について研究を継続している。また、学習指導要領の改訂にあたり、教科の目標や内容が3つの柱で整理されたことを受け、今の子供たちに必要な音楽教育の在り方についても一度見つけ直し、さらに研究に取り組むことにした。

2 大会主題について

本研究大会では、知識や考え方を一斉に指導するような授業ではなく、子供の協働的な学びを通して、子供たち自身が学びを実感しながら学びを構築することができるような授業のデザイン力を求めることとした。すなわち、小・中・高12年間を見通し、子供の思いや学びの筋にそって、子供と共に授業を創っていく授業のデザインを研究する方向性を打ち出した。そして、子供の学びを丁寧に見取り、子供の主体性を引き出したり学びをつないだりすることで、学びが深まっていく、そこに音楽を学ぶことの意義があると考えた。これらのことから、本研究の大会主題を「求める 深める つながる 音楽の学び」と設定した。

「求める」・・・音楽の学習に主体的に取り組む、目指す自分の姿に向け学びを積み上げていく子供の姿

「深める」・・・音楽を探究的に学び、さらに深い学びへとつながっていく子供の姿

「つながる」・・・学びがより深いものへとつながっていくことのみならず、協働的な学びを通して、子供が自身の過去や未来・将来、地域や社会、様々なものにつながっていく姿

3 研究の構想と視点

(1) 教師の授業デザイン

研究の方向性を確かなものとするために、以下の3つを重視しながら「授業のデザイン」に取り組むこととした。

①子供たちのつづやきを大切にする

子供たちのつづやき(発意)を受けとめ、その言葉や表情から思いや意図を丁寧に見取ることにより、教師は主体的な学びを構築するための教材提示や声かけ、場の設定などを工夫することができる。そして、それは音楽的な見方・考え方を働かせた学習の基盤となる。

②子供たちが自分の学びを実感できる

子供たちの発意が揺さぶられることで、主体的で対話的な活動が促され学びが深まっていく。知覚・感受したことを基に思いや意図をもって表現したり、イメージを膨らませながら音楽を味わって聞いたりすることで子供たち自身の学びの価値や意味を見いださせるようにする。音楽的な見方・考え方を働かせた学びを積み重ねることで、子供たちは自己の学びを実感し、次の学びへと繰り上がっていくことを期待する。

③音楽によるコミュニケーション

学校教育における音楽活動は、音や音楽によってコミュニケーションをとる。思いや意図を音や音楽によって、イメージなどを言葉によって発想豊かに伝え合うことで、さらに自分の気付きや感受したことを深め、音楽の豊かさや美しさをより一層深く味わわせてい

く。こうした活動は、子供たちの多様で豊かな情報の伝達や伝え合う力を育成することも期待できる。

(2) 研究の視点

上記の研究の構想をより具現化し授業実践を積み重ねるために、次の3つの研究の視点を設定した。

①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり

- ・子供自身が、生活や社会の中の音や音楽の動き音楽文化への関心や理解を深める。
- ・子供が学びの見通しをもったり、学びを振り返ったり、学んだことや自分の変容を自覚したりできるようにし、次の学びにつなげられるようにする。
- ・子供が多様な他者との対話により、自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。
- ・子供が、思考・判断し表現する一連の過程において音楽的な見方・考え方を働かせることができるようにする。

②発達段階に応じた資質・能力を育成する題材構成

- ・子供の発達段階を見取り、〔共通事項〕を軸として、どのように題材を構成することが学びの質の向上につながるかを検証する。
- 例) 発問や教材提示の工夫、学びのポイントの提示、揺さぶりや刺激などのタイミング、鑑賞教材の工夫、教師の出番の確保

③子供自身が学びを実感できる振り返りや教師の見取りの在り方

- ・学びの定着を子供自身が確認できる振り返りを工夫したり、新たな課題へ興味・関心を喚起したりしながら、子供の中で学びがつながり発展していくようにする。
- ・組織的に進める研究として、参観者も子供の学びの筋に沿って授業を観察することで目指す授業の本質を捉える力をつけていく。

(3) 授業後の研究会について

授業後における学びを子供の思考や学びのつながりで見えていく「子供の学びの筋で授業

を見取る」ことが有意義な研究会になると考える。同じ授業を参観した参加者が、子供たちの発言やつぶやき、表情などの様々な表現から見取った学びの変容を語り合うことで、教師の支援の在り方を探り授業づくりに生かしていく。

4 小学校部会テーマについて

大会共通テーマを受け、小学校部会では以下のような具体的な子供の姿を目指した。

〈低学年〉楽しく音楽に関わる子

〈中学年〉音楽の良さに気付きながら楽しむ子

〈高学年〉音や音楽と自分の関わりを気付きながら生活を明るくする子

低学年は、幼児期からの経験や体験を生かし、遊びの中から音そのものやリズムを楽しむ。また、イメージに合った音を出そうと楽器選びや奏法にこだわり、試行錯誤しながらびったりな音を見つけ出す。低学年は「気付きから音楽的な学びへとつくる」時期と考える。中学年になると、低学年からの学びを生かし、自分の思いや意図をもって音楽活動に取り組む。音の重ね方について仲間の思いに耳を傾け、音や音楽を通じて工夫をするなど協働する姿が見られるようになっている。中学年では、「協働により個の学びが全体の学びへとつくる」時期と考える。高学年では、楽曲などの多様な他者との対話ができるようになる。例えばよりよい表現（合唱）のために、歌詞から作者の思いを読み取り、それが旋律にどのように表れているのかを探ったり、鑑賞曲では構造的に音楽を聴き、思い浮かべた情景と曲の感じを重ねて考えたりするなど「広い学びから深い学びへとつくる」ことができるようになる。この「つくる」は、子供の主体的な姿の意味が含まれている。

そこで、小学校部会では、子供が主体的に音楽に関わり、自己の学びを見つけ、広げ、深めることができる授業づくりを目指し、学びを「つくる」をテーマとした。

中学校部会テーマは、『学びを「紡ぐ」』高等学校部会は、『学びを「拓く」』とし、音楽科の育成すべき資質・能力について12年間の見通しをもち研究を進めることとした。

5 研究の成果と課題

子供自身が学びをつくり出し、学びを実感しながら、他者との協働によりさらに広げたり深めたりすることができる授業づくりを目指し、授業実践を積み重ねてきた。また、当日は、授業参観者が授業における子供の姿から学びを見取り語り合うことで、子供の学びの筋から授業をデザインしていくという授業づくりの本質に迫ることができたと考える。

研究協議会では、教師の一人一人の学びに寄り添う姿や、見通しをもち子供の思いをつなげたり、時には軌道修正したりするファシリテートに参加者の共感が得られた。また、子供の姿を見取ることから、教師の在り方や支援の仕方を探っていく、いわゆる福井型の研究協議のスタイルは、音楽科のみならず他教科も同様に、主体的・対話的で深い学びへの実現に向けた授業改善につながっていくことも確認できた。今後は、子供たち自身が音楽的な見方・考え方を働かせた授業を積み重ねることで、さらに質の高い学びのある授業づくりを求めていく。

そのために、音楽科として育成したい力を明確にして、教師のねらいと子供たちのめあてのずれを修正しながら進めていく必要がある。子供たちは「鳴らしてみたい」「きれいに仕上げたい」「美しくまとめたい」といったゴールがとらえやすく、達成感を感じやすいために「めあて」としがちである。しかし、教師は、例えば「音楽づくり」ならば、音そのものの響きやその組み合わせを試したり味わったりしながら、思いや意図をもってつくることを目的とし、「どんな音楽が出来上がったか」ではなく、「子供がどのような音楽の見方・考え方を働かせて、試行錯誤しながら

音を音楽としてとらえていったか」という過程を重視しなくてはならない。やはり、教師は、子供の思いに寄り添うことも大切だが、子供たち自身が、音楽的な見方・考え方を働かせるきっかけをもてるように、「なぜ?」「どうして?」「どうしたい?」と問いかけることも必要である。音楽科が目指す資質・能力や授業における学びのポイントを、教師の教材の提示の仕方や声かけなどで、目の前の子供とそれらを共有し、豊かに音や音楽と関わりながら子供と授業をつくることを大切にしたい。

6 大会を終えて

当初予定していた参集型の研究大会は、紙上発表か次年度先送りかと何度か話し合いが行われた。しかし、「福井型研究スタイル」の研究成果を最大限に発揮できるのは、オンラインしかないと考え、令和2年10月にzoomによる研究協議会、11月には、提案授業や研究演奏はYouTube、研究紀要はPDFで事前配信することを決定した。前例のない形での開催は、音楽の授業そのものがままならない中、授業づくりの研究や授業の動画作成、オンラインでの研究協議会の持ち方など、最善の形を求めて試行錯誤しながら進めるしかなかった。結果、配信する授業は何度でも視聴可能であり、時間をかけて撮影した研究演奏は、子供たちの成長が見られメッセージ性の高いものとなった。また、当日に向けて画面越しの研究協議を重ねたことで、ファシリテートのスキルも身に付いたと思われる。一人一人の部員が、何ができるのかを考え、最大限に力を尽くした甲斐があり、小学校だけで300名近く参加があったこの大会は、事前配信を含め、オンラインの良さが生かされ、充実した研究大会であったと賛辞をいただいた。